

迷えるパイオニア・ウーマン

— *Sapphira and the Slave Girl*における
Sapphira の二面性をめぐって—

志 水 智 子

Abstract

In Willa Cather's *Sapphira and the Slave Girl* (1940), Sapphira is one of "pioneer women" who make their own ways of life as well as their social positions by their vigorous efforts. Sapphira is a powerful leader of her family and manages household economy while her husband, Henry, who is four years younger than her, is weak and passive. However, in this novel, Cather describes Sapphira's declining years and reveals her physical and mental weakness. Sapphira has two faces, a beneficent family leader and a merciless slave owner. In this essay, I'd like to consider the meaning of pioneer women's late years.

Sapphira is a type of Captain Forester in Cather's *A Lost Lady* (1923), who is "strong in attack but weak in defense." Although she wishes to control her family and slaves completely, they continue to revolt against her. That is, Sapphira's sacred sphere must be changed. Her youngest daughter, Rachel, thinks the slave system to be a social crime and helps Nancy, her mother's slave, in her escape. Moreover, the fact that Nancy is mixed-race reveals Sapphira's failure in controlling her slave's sexual intercourse. Sapphira can win neither at physical disease nor at age.

When Sapphira admits Rachel's revolt against her, she accepts her defeat, age and destiny of pioneers. Although Rachel betrays Sapphira by letting Nancy run away, she respects her mother. By describing Sapphira's late years as such, Cather may intend to insist that it is pioneer women's duty to yield her position as a pioneer to her daughter and to admit the change of what she accomplished.

序

Willa Cather の最後の長編小説 *Sapphira and the Slave Girl* (1940) は、Cather の長年のパートナーであった Edith Lewis によると、Cather がそれまでにない熱意を注いだ作品であった。Lewis は “she [Cather] worked at Sapphira with a resoluteness, a sort of fixed determination which I think was different from her ordinary working mood; as if she were bringing all her powers into play to save this” (184) と述べる。Cather はこの作品を書く前に Lewis を伴って、自分の生まれ故郷であり、作品の舞台となるバージニア州のウィンチェスターやバック・クリーク、自身が生まれた村などを訪ねる旅をし、その時体験した美しい自然の風景をこの作品に描きこんだ。このため、作品中に現れるさまざまな人間苦にもかかわらず、豊かな自然描写がこの作品を牧歌的で郷愁が全体的に漂うものになっている。

Cather の母方の曾祖父母をモデルとした、Henry Colbert と Sapphira 夫妻は、バージニア州フレデリック郡のバック・クリークで水車小屋を営み、奴隷を従事させる大きな屋敷を構える。時代は1856年、南北戦争勃発の5年前にあたり、Sapphira は実家から連れてきた20人余りの奴隷たちを当然のように使用する南部貴族的習慣を身に付けているが、夫や末娘、バック・クリークに住む近隣の人々は、奴隷使用に対して否定的な考えを持つ場合がある。しかし彼女はよそ者でありながら叔父の世代から受け継いだ土地を自ら馬で調査し、独力で水車屋敷を建て、社会階級が格下である移民の男、Henry Colbert と結婚し、奴隷を含む大家族の総監督者として家族や使用人たちを管理、支配しながら裕福な家庭を築き、土地に根付くことに成功している。このように自らの力をたよりに精力的に生きる地歩と生活基盤を確保する Sapphira は、Cather 文学における「開拓者」(パイオニア) の一人と言える。

だがこの作品では、Sapphira が一定の社会的家庭的成功を得た後の晩年期、彼女が水腫症にかかって足が不自由となり、夫婦や母娘の気持ちがすれ違い、若い奴隷娘 Nancy への嫉妬心がうずまく、悶々とした時期の Sapphira の状況が描かれる。苦悩し、嫉妬する Sapphira には、パイオニアらしい自律性のある行動力や建設的合理的思考が見られない。またもともと彼女は裸一つで未開拓地に挑む移民者の家に育ったわけではなく、独立戦争前からの由緒ある家庭で、父 Dodderidge 大尉とイギリス生まれの母を持つ令嬢である。すると Sapphira は「パイオニア・ウーマン」であるだけでなく、Cather 文学における何種類かの人物類型の要素を備えていると考えられる。

まず、パイオニアとして自らの地歩を築くものの、老衰期にその地歩の瓦解を経験するという面において、Sapphira は紛れもなく *A Lost Lady* (1923) における “strong in attack but weak in defence” (*A Lost Lady* 100) と描かれる Captain Forrester の系譜に属する人物である。また、嫉妬心、男性への支配欲にとらわれる面においては、*A Lost Lady* の Marian、*My Mortal Enemy* (1926) の Myra の系譜に属する。さらに成功をおさめた後の苦悩と根源的自我への憧憬に陥る面においては、*The Professor's House* (1925) の St. Peter と類似する。そして、描かれてはいない青年期と「サフィラ王国」樹立までの上昇期における、自立した行動と決断力、家父長的主導力に関しては、Sapphira は、*O Pioneers!* (1913) の Alexandra、*The Song of the Lark* (1915) の Thea の系譜にいたことも確かである。このように Sapphira は Cather 文学のさまざまな人物像を集結させた特徴を持つ¹。

St. Peter と同じように Sapphira は、理性によって自分の立場をわきまえて行動すること、すなわち社会的自我を意識することをしばし忘れ、本能的な欲求、すなわち根源的自我による抑えきれない嫉妬と攻撃欲により Nancy を苦しめる。この作品執筆時の Cather は Sapphira よりも数歳若いと考えられるが（小鹿原 261参照）手首の痛みや胆嚢炎の手術など、加齢ゆえの身体的苦痛を感じる時期であった。すでに両親を亡くしていたことと

自らの老境ゆえに、Cather が自分の幼年期と出生地をテーマとする作品によって自らのルーツを振り返りたい気持ちになったことが察せられる。Cather にとって幼年期を振り返り、故郷を描くということはすなわち自らの根源的自我を見つめることであると考えられよう。Sapphira の根源的自我が呼び起こす陰湿な嫉妬や苦悩、そして奴隷娘 Nancy が感じる抑えがたい主人の家への郷愁が表象するものを通して、Cather はいかにパイオニア・ウーマンがその威厳を失うことなく老いを生きていけるかということを模索していたと考えられる。本稿では二面性を持つ Sapphira の物語によって、パイオニア・ウーマンの晩年期にいかなる意味が読み取れるのかという問題を考察していくこととする。

I : 「攻めには強いが守りに弱い」パイオニアたちの宿命

先見の明があり、男性的で実利的、かつ策略を秘める Sapphira は、パイオニア・ウーマンとして自ら社会的家庭的地歩を築く。その「サフィラ王国」とも呼べる家庭の体制は Sapphira の「攻め」の管理力によって維持されるが、同時に動かぬ聖域ではない。それは内外の力によって絶えず境界を侵犯されつつあり、Sapphira がその聖域を完全に「守り」切るのは不可能である。このように境界侵犯を受けることを避けられない「サフィラ王国」が意味するものについて考察していきたい。

まず、Sapphira の「攻め」の管理力がある程度の成果を挙げている状況についてまとめる。Sapphira が選んだ夫 Henry は、彼女より家柄や経済的階級が劣り、4 歳年下で、無口で勤勉、思索型でおとなしく、Sapphira が上に立って管理できる伴侶である。Sapphira が家長となる点については、Judith Fetterley も、“she [Sapphira] married a man willing to let her be the master” (19) と指摘する。また、しきたりが重んじられ、うわさをたてられやすいというウィンチェスターの実家から離れ、叔父から受け継いだ粗野なバック・クリークで生計を立てようとしたことは、世間の慣習に

とらわれずに、自由に自分の生活スタイルを貫きたい計画を可能にしている。かくして Sapphira は自分を実質的な家父長とする、自分が完全に管理、支配できる家庭を築く。

Sapphira は奴隷たちを厳しく管理するが、一方で奴隷たちに楽しみを与えることを好み、奴隷の出産時には布を贈り、失恋で奇行に走る Dave や忘れものの Bluebell を大目に見、Jezebel に立派な葬式をするなど、慈愛ともとれる態度を見せる。彼女はいわば鉛と鞭を使い分けつつ奴隷たちの心理を操り、その忠誠心を引き出している。奴隷たちは主人に反感を持つことなどありえず、主人が強いリーダーシップによって指導してくれることを望み、Sapphira に主導力があるゆえにいつそ奴隷たちは彼女を慕う。視界が限られ、屋敷以外の外の世界を知らない奴隷たちは、奴隷主という「親」に管理され守られる子供であるかのような錯覚を持ち、奴隷制そのものの是非という問題に気づく奴隷は存在しない。

アフリカから拉致され、奴隷船に乗せられた際には凶暴に白人に歯向かった Jezebel でさえ、Dodderidge 家や Colbert 家で長年働いた後には、忠実な老女として Sapphira の信頼と愛情を得、若い奴隷たちの衣服をつくろう仕事をしながら、“She meted out justice by giving a slack boy a rough seat in his breeches, and a likely boy a smooth seat.” (98) と描かれるように、女主人に代わって奴隷たちの労働状況を管理し、賞罰を与え、Sapphira が敷く秩序の維持に貢献する。Jezebel は拉致され、人権を奪われた被害者でありながら、その事実の是非は彼女の中で抹消されている。彼女はすでに Sapphira 側の奴隷管理者としての視点を持ち、家族同然に尊重されるのである。

さらに、水車小屋の奴隷頭である Sampson は、主人の Henry Colbert から自由の身にしてやろうかという提案を持ち掛けられた際には、泣いてそれを断り、“This was his home. Here he knew everybody. He didn't want to go out among strangers.” (111) と描かれるように、彼の「家」

である Colbert 家にずっと奴隷として置いてくれるよう懇願するのである。彼は Colbert 家で誇りをもって快適に生きることはできるが、自由に生きる方法も外の世界も知らず、彼にとって自由とは恐怖を意味する。Colbert 家から逃亡せざるを得なくなった Nancy も Sampson が感じる外の世界と自由への恐怖に打ちのめされ、Colbert 家での生活が眩しいほど安定し、守られているかのような幻想に大いにとらわれる経験を共有する。このように Sapphira の奴隷たちは、視野の狭い子供時代の幻想の安定を享受するかのようになり、Sapphira の敷く体制を遵守することが正義であり、恩恵を得られる方法であると体得することで、「サフィラ王国」の維持に貢献するのである。

Sapphira は自分の王国の秩序を死守しようと抜け目なく、彼女の意図する秩序を脅かすものは容赦なく排除し、そのために手段を選ばない「攻め」の姿勢を貫く。娘 Rachel からみた母の性質は、“... Mrs. Colbert, though often generous, was entirely self-centred and thought of other people only in their relation to herself.” (218) と描かれる。Joseph R. Urgo はこのような Sapphira を、“the most evil woman in American literature” (93) と、Morton Dauwen Zebel は、“imperious wife” (573) と、Roseanne V. Camacho は、“phallic mother” (70) と表現し、いずれも Sapphira の自己中心的な強靭さを指摘している。Sapphira は Nancy を、自分の女性としての夫に対する支配力を脅かす存在と認識し、彼女を排除するために陰湿で執拗な手段を講じる。その結果、Nancy が逃亡したことは、Sapphira の自尊心を傷つけるが、Sapphira にとって不本意な方法であったとはいえ、ともかく Nancy という脅威は取り除かれるのである。

しかしこのように「攻め」に強いはずの Sapphira であるが、その管轄外である「サフィラ王国」外からの力、誰もが抗えない時間と時代の流れといったものにより、彼女の築き上げた聖域の秩序は成り立つそばから、そして常に侵犯されつつある。

まず、バック・クリークの土地自体が、多くの奴隷を抱える家は珍しい場

所である。この様子は、妻の奴隷使用を好ましいとは思っていないが、その体制を侵犯するまでの行動力はない、いわば消極的反体制派である Henry の、“You never seemed to understand how, when we first moved up here, your troop of niggers was held against us. This isn't slave-owning neighbourhood.” (12) という控えめな非難の言葉に表れている。そして家族でありながら実質的な反体制の行動を起こす Rachel は、Nancy を逃亡させることで Sapphira の権威を傷つける。Rachel が12歳の時、彼女に奴隷制が悪であることを確信させた、この地の郵便局長である Mrs. Bywater とその父 Mr. Cartmell は、間接的に「サフィラ王国」の体制を侵犯していると言える。

また、Sapphira に最も忠実に仕え、完全にその秩序を遵守しているかに見える奴隷 Till が、外からやって来た旅の白人の画家かあるいは Henry の兄弟によって妊娠し、Nancy を生んだこと自体が、Sapphira が敷く秩序への反逆行為であり、Nancy は秩序崩壊の体現者である。Sapphira は自分の世話を常にする役割の Till が、妊娠や出産により自分以外のことに煩わされないよう、妊娠の可能性のない老人 Jeff と結婚させたのだが、この意図は外からの作用によって裏切られ、Till は妊娠出産し、Nancy を持つに至っている。しかも Nancy は白人との混血であり、彼女は Sapphira が属する主人の人種との境界、さらにはもし Nancy の父が Henry の兄弟であった場合は主人家族との境界を侵犯する存在となるのである。

誰もが抗えない時間の流れと老い、それらがもたらす病は、年長の支配者と若輩の被支配者の力関係を自然に覆す。水腫症を患い、動きが不自由で、夫と寝起きを別にするようになった Sapphira は、女性として夫を惹きつける力に関して、若くて美しい Nancy に劣る。ゆえに Nancy は、Sapphira の夫を支配する女性的魅力の主導権を侵犯するのである。また老いゆえの Sapphira の偏執狂的な妄想が、結局は Rachel という反体制分子の反逆の実行を招く。このように自然の時間の流れがもたらす老いが、Sapphira の

敷く「サフィラ王国」の秩序を揺るがしている。

さらに、Sapphira 自身の人生は南北戦争前に終わるが、この作品では時代の流れの一つとして南北戦争が完全に南部社会を変える時点までが描かれている。この作品出版の4年年前に出版され、前年に映画化された、Margaret Mitchell 作の *Gone with the Wind* (1936) と並んで、この作品では南部の変貌と、新しいパイオニアたちの到来が必然的にモチーフとなるのである。Sapphira が全力で築き上げ、自分を頂点として奴隷たちを管理する「サフィラ王国」の体制は、迫りくる南北戦争によって完全に崩壊させられることが必然となる時代設定である。

このようにいくら Sapphira が「攻め」に強いパイオニア・ウーマンであっても、彼女の築いた聖域は内外の力によって侵犯されることを免れない。「サフィラ王国」の揺るぎは、パイオニアたちが築いた一つの安定が、必ず「動かされる」宿命にあることを象徴している。

II：「母の娘」の物語

Edith Lewis によると、Cather は自分が母に似ていると考えていたという (Lewis 7)。Lewis は、“Willa cather’s mother, Mary Virginia Boak, was a handsome, imperious woman, with a strong will and a strong nature.” (6) と述べる。このような Cather の母の性質には Sapphira や、Sapphira の裏をかく Rachel の行動力のある生き方、また Cather 自身の自立した生き方が重なるのである。この作品は Cather の母方の家系をモデルとしているためか、女系家族、母と娘の組合せが幾通りか登場し、女性中心の物語となっている点が特徴的である。次に、Sapphira を取り巻く女性達の意味を考察し、Cather の女性としての老い方の模索を、Sapphira の生き方の中に読み取っていく。

Sapphira の孤高で行動的、自律性の高い側面と、嫉妬深く異性への支配欲にこだわる側面という二面性に加え、彼女を取り巻く女性たちも、男性よ

りも個性と存在感が強く描かれている。Cather 文学における女性像については、小鹿原昭夫もまた、「キャザーの作品に登場する女性は男性よりかいろいろな意味でたくましい・・・男は現実を回避しようとする理想肌の弱いところがあるが、女はおしなべて現実をそのまま受容する。多くの場合、物質主義的、拝金主義的になることも辞さない」（4）と述べる。小鹿原の述べる男女像は、Henry と Sapphira の夫婦関係にそのまま当てはまると言える。

Sapphira は女ばかりの姉妹の長女として育ち、その子供もまた娘ばかりである。妻を実質的な家長とみなす Henry は、いつも無口で John Bunyan の *The Pilgrim's Progress* (Cather が幼年時代に親しんだ書でもあった) に慰めを見出し、思索を好み、奴隷制に関しては、“... were we not all in bonds?” (112) と自問し、実行力のない精神論で自分を納得させるにとどまる。彼には実際に Nancy を逃亡させる娘 Rachel のような行動力や決断力はない。Rachel は父と同じく奴隷制に反対で、父の理性重視の性格と類似する面を持つかのようでありながら、Nancy の逃亡を計画し、実行に移す行動力は Sapphira 譲りと言える。Rachel の築く家庭もまた、夫と息子を亡くした後、男性は存在せず Rachel が家長であり、ジフテリアを克服できた娘 Mary が家系を継いでいくことになる。このように Sapphira の家系は、自立し行動する「母の娘」がつかないでいくのである。

また、奴隷の Jezebel の家系も女系であり、夫や父となる男性の影は薄い。強靱な肉体を持つ Jezebel は Sapphira の信頼を得、女主人同様、Colbert 家では大きな存在感を持つ。Jezebel は娘を火事で失うが、孫の Till は Sapphira に一番近い位置で仕えることに誇りを持つ信念の人物であり、さらにその娘の Nancy は不本意ながらではあるが、Colbert 家の外の世界、「自由」の世界への旅立ちに挑むこととなる。Till を妊娠させた相手は、旅の画家であれ、Henry の兄弟であれ、一過性の存在に過ぎない。また Till の夫である老齢の Jeff は、性的能力に欠け、次世代の再生産能力を持たず、女

主人直属の召使いとしての地位を最も大切にしている Till に対しても、彼を本当の父ではないとわかっている Nancy に対しても、影響力も存在感も薄い男性と言える。Jezebel の家系が生み出した母娘は Sapphira の二面性を引き出す存在であり、また Rachel に Sapphira の娘としての系譜を与える役割を果たす。Rachel を動かすきっかけとなる Nancy の位置づけについては、Newman も、“Nancy — in whom black and white, past, present, and, significantly, future are joined. . . . She is the locus of power through which Rachel constitutes her subjectivity” (Newman 55) と指摘している。

さらに Rachel が訪れる Mandy Ringer 夫人は、娘二人を強姦され、私生児の孫を持つ。ここにも娘の夫たる存在、子どもの父たる存在はない。Ringer には親孝行な息子 Lawndis もいるが、彼は足が悪く、体が不自由で、妹たちを守ることもできなければ結婚して次世代を生み出すこともない。また少女時代の Rachel に奴隷制は悪であると確信させるきっかけとなった郵便局長の Mrs. Bywater も、夫に死なれたのち女手一つで仕事と子育てをこなしている。Ringer は過去のつらい経験にかかわらず明るく、Mrs. Bywater は奴隷制を拒否する信念の人である。彼女たちは男性に守られなくとも、自分たちの与えられた立場で、たくましく生きているのである。このように、Sapphira や彼女を取り巻く女性たちの状況に、行動的な母の影響を受け、女性のパートナーを持ち、その人生に男性の影は弱いが、自ら男性的要素を持つことを望み、男装も好んだ、Cather 自身の女性としての生き方を読み取ることが出来る。

Cather の女性としての老い方の一つの理想像もまた Sapphira の二面性を家族たちが受容する様子を読み取ることが出来る。嫉妬心に懊悩する Sapphira は、Nancy を性的に凌辱する策略をたてるが、それは直接的には Rachel によって、間接的には Henry によって阻まれ、その独裁的な主張を否定される。この事件は、母 Sapphira から娘 Rachel への、パイオニア・ウー

マンの座の継承儀礼とも言える。Fetterley もこの世代交代を、“daughters become mothers” (20) と指摘する。しかし同時に Rachel は、母の「王国」の体制を裏切ったことを反省し、母を傷つけたことを、“I hate to mortify her. Maybe I ought to a-thought about how much she suffers, and her poor feet, like Nancy said to me that night in the dark cabin by that roaring river. Maybe I ought to have thought and waited.”

(242-3) と後悔するのである。また、Nancy に妻 Sapphira にはない安らぎをみとめ、妻の敷く体制に消極的ながらも反目していたはずの Henry も、次女 Betty をジフテリアで失った Rachel を家に呼び寄せて一緒に暮らすことを Sapphira が提案し、Rachel に対する寛大さを示した時には、Sapphira に対する敬愛の気持ちで感極まって彼女の手を顔をうずめる。Sapphira が娘に裏切られ、自分の「王国」の聖域が侵されたことを受け入れたこと、パイオニア・ウーマンの座を娘に譲ったこと、病と老いを冷静に受け入れていることは、Henry の次のように描かれる尊敬の念を呼び起こすのである。

... he had always been proud of her. When she was young, she was fearless and independent, she held her head high and made this Mill House a place where town folks liked to come. After she was old and ill, she never lowered her flag; not even now, when she knew the end was not far off... As long as she was conscious, she would be mistress of the situation and of herself. (263-4)

Henry の中で、Sapphira の横柄さや冷酷さは自らの人生を牛耳ろうとする強い信念の美学へと置き換わる。こうして Sapphira は、Nancy の排除にも結果的に成功し、自らの欲望も周囲の敬愛も勝ち得るのである²。このように、Sapphira がその利己性に眼をつぶられ、敬われるストーリーにも

Cather のパイオニア・ウーマンへの敬意がうかがえる。

威厳ある寛大さと、嫉妬心ゆえの残忍さを併せ持つはずの Sapphira は、パイオニア・ウーマンとしての衰退期と病、迫りくる死をいずれも威厳をもって受け入れることで、夫 Henry、娘 Rachel、直近の奴隷 Till らから、信念のある生き方を評価される。彼らの評価により、Sapphira が備えていた嫉妬心や自己中心性、ゆがんだ性的支配欲といったものはまるで彼女の本質ではなく、二次的な要素と化すのである³。Sapphira が水腫症や、奴隷に対する頑固な価値観によってその場やその考えから「動けない」ことからくる苦しみは、家族らの視点から、「動かない」ことの価値と信念の美しさにすり替わり、Sapphira は敬愛の対象になりえるのである。男性に頼ることも男性から抑圧されることもなく個の自立を保ち、自分の老い、迷い、敗北などを受け入れること、つまりパイオニアの宿命を受け入れることで、その人生に含まれる過ちもまた信念のうちに昇華してしまう Sapphira の姿に、パイオニア・ウーマンの一つの理想の老い方、死に方が追究されていると言えるのではないか。

Ⅲ：故郷への愛着が表象するもの

最終章の第二部では、逃亡から25年後にバック・クリークへと帰ってきた Nancy と彼女を迎える人々を目撃する、“I” という5歳の人物の視点が突然登場する。この“I”が誰であるのか、作品中では明記されない。しかし、Cather が弟 Roscoe に宛てた書簡の中で、5歳の時の記憶を、当時の天気もそのままに描いたとし、“Every word in the scene of Nancy’s Return is true, my boy, even the weather.” (*Letters* 591) と書いている故に、ここで幼年期の Cather 自身が登場していると考えてよいであろう。この解釈については“Willa Cather herself appears, as a five-year-old child” (Romines 4) と指摘するエッセイを始め、多くの先行研究で同じ解釈が見られる。かくしてこの時点で、Cather の母方家系の史実を織り交ぜたフィ

クシオンは、Cather の幼年期の回想というノンフィクションと交差する。これにより、この作品は、“My end is my beginning” (Porter 293) という Cather の言葉通り、彼女の老い方をそのルーツとなる経験の中に追求する物語となる。

Colbert 家の甥 Martin から強姦される運命を避け、Rachel の導きでカナダへの逃亡を決意したはずの Nancy は、ポトマック河を渡った際、未知の世界で生きることへの恐怖にひるみ、Rachel に、“Oh, Miz’ Blake, please mam, take me home! I can’t go off amongst strangers. It’s too hard. Let me go back an’ try to do better. I don’t mind Miss Sappy scoldin’ I want to go home to the mill an’ my own folks.” (232-3) と訴える。このような Nancy の気持ちは、生まれ育った Colbert 家より外の世界を知らないゆえの郷愁と言えるが、25年後に戻ってきた Nancy にとっても Colbert 家の人々は喜ばしく感じられる。そこで最後に、「故郷」を慕う奴隷たちの愛着心が示唆するものと、「故郷」によって表象される根源的自我の意味について考察していきたい。

Sapphira の奴隷たちは外の世界や自由を恐怖であると感じ、Colbert 家がすべてであるゆえに、そこを主人夫妻によって守られた安定した生活圏であると認識する。彼らは自由であることの幸福と喜びを、口にしたことの無い知恵の木の実のごとく知らない。他人の財産ではない自由民に備わる人権の価値と重要性を知らないゆえに、Sapphira の奴隷たちは Colbert 家に安寧を感じるのである。こういった奴隷たちの故郷愛と自由への恐怖心は、Sapphira の奴隷管理力の手腕の結果であると言える。この点については、Joseph R. Urgo もまた、“Nonetheless, Sapphira was a good manager . . .” (33) と述べる。

またどのような境遇であっても、それを不自由や不幸ととらえることができない奴隷たちの見識は、人間の幼年期の視野の限界と無垢、庇護者への無条件の愛着心といった心理に比することができよう。奴隷たちは与えられた

環境に順応し、それなりの喜びをみいだしている。「親」たる存在である Sapphira の敷く体制を受け入れ、その体制の維持に積極的に貢献する奴隷たちにとっては、Sapphira の体制に積極的関心を寄せず、リーダーシップのある「親」にはならない Rachel は人望がないわけなのである。奴隷たちには人権を侵害され、搾取されているという概念はなく、権威ある「親」Sapphira に「守られ」、恵みを受けているという認識しかない。それゆえ自由の道が開かれる可能性を目の前にした Sampson や Nancy には、自由とともに引き受けなければならない直接社会と対峙する必要性の重みがたえがたく、彼らは主人から管理され守られていた生き方に執着を感じるのである。この作品では、Cather の奴隷制に対する是非が問われているわけではない⁴。Cather は奴隷制に賛成しているわけでは決してないが、南北戦争終結とともに永遠に失われた、子ども時代の安心感に比せられる、管理され、与えられ、守られるという奴隷たちの生活は彼らの郷愁を呼び起こすような安寧を備えて描かれる。故郷への無条件の愛着というのは子どもの心理のように自然で本能的、かつ人にとって不可欠であることも読み取れよう。人が抱く故郷への愛着心については、Russell も、“Creating some type of home is crucial to physical and psychological survival.” (Russell 125) と指摘している。このように労働を搾取されていた現実にも関わらず、故郷たる家やそこに住んでいた人々は Nancy にとって懐かしく、存在感を失わないものなのである。

故郷に帰還する Nancy と、Cather 自身の幼年期の思い出というノンフィクションが交錯した時点で、Cather 自身にとっての故郷の意味もまた表現されていると考えられる。故郷に帰らねばならなかった Nancy と同様、生まれ故郷と、幼年時代の記憶を素材とするこの作品は、Cather の、自分の本質的な生き方や人生観を育んだ幼年期の体験の解明と言える。社会や他者から求められる自己役割を意識した自己主張欲求を社会的自我と定義し、それに対して社会的属性を無視した本能的で生来的な自己主張欲求を根源的の自

我と定義すれば、Catherの故郷と幼年時代への心理的回帰は、彼女の社会的自我に対する根源的自我への回帰のメタファーと考えられる。*The Professor's House*のSt. Peterは、根源的自我を追求する中で死の危機と、老女Augustaの生き方に出会い、社会的自我を取り戻して生きていくことを決意する。ところがMyraやSapphiraは、物欲、嫉妬心といった根源的自我による感情を野放しにし、自己中心的な生き方をするのだが、彼女らの利己性はいずれも家族らによって受け入れられ、許される。Sapphiraの生き方には、社会的、倫理的過ちが含まれているのだが、それら自らの根源的自我がもたらした過ちを否定することもされることもなく、そのようにしか生きられない自己を孤高の中に受け入れるSapphiraの最後に、晩年のCatherの根源的自我に対する許しと受容の気持ちを読み取ることが出来る。Sapphiraの死に際は、“And the Mistress died there, upright in her chair Though her bell was beside her, she had not rung it. There must have been some moments of pain or struggle, but she had preferred to be alone.” (287)と描かれる。社会的是非や倫理性はどうであれ、自らにとって切り離すことが出来ない根源的自我には、奴隷たちが自分たちを搾取しているはずの主人の家に対して郷愁を抱いてしまう気持ちと同じく、打ち消す必要のない存在感があるのだということをSapphiraの老いと死は体現しているのである。

Nancyが抱く郷愁や、家族によって受け入れられ尊重されるSapphiraの人生によって示唆されることは、パイオニア・ウーマンが信念をもって成し遂げた体制や価値観は、たとえその倫理的な是非の判断が時間とともに変化したとしても、それを認めた人々にとっては、それが滅びてもその存在感は揺るがないということではないだろうか。

結

SapphiraはRachelから見て、慈愛と残酷さという二面性を持ち、自己

中心的であってもそのようにしか生きられない女性である。Sapphira という名は、聖書の使徒言行録におけるアナニアとサフィラの話では、土地を売った代金を、その一部は隠し持ちながら、全額神に献上すると嘘を言って見栄を張ったため、神の怒りを買ひ、夫とともに死ぬ妻の名であるが、このエピソードと通じる部分は、Sapphira が利己的ではあるが、完全な悪者ではないという点である。Urgo もまた、“Cather makes it impossible to read the woman as a simple villain.” (32) と指摘する。さらに Urgo が指摘する、“wanting to hold back something for herself” (32) というサフィラの神をも恐れない自己主張は、この作品における Sapphira の利己性を威厳へと昇華させる主張の強い人生に通じる。この作品の Sapphira にとっての罰は水腫症による不自由や娘の裏切り行為と考えることが出来るが、最終的に彼女は彼女を取り巻く人々から許され敬われる。

Cather は Sapphira の生き方を通して、威厳と秩序の樹立に邁進し、成功をおさめたパイオニア・ウーマンが、根源的自我の欲求や身体的衰弱に直面しながらも、いかにパイオニア・ウーマンでありきることが出来たかを追求したと考えられる。パイオニア・ウーマンの成長、成功、喜びの時期ではなく、老い、裏切りへの敗北、死が描かれながら、Sapphira の存在感と魅力は時間の変化に耐える。そして、安定した価値観の転覆や地位の崩壊を認め受け容れ、パイオニアとしての能力を次の代へと継承させることは、パイオニア・ウーマンがパイオニア・ウーマンでありきるための最後の務めであるとする Cather のメッセージが読み取れると考えられる。

註

- 1 Merrill Maguire Skaggs は、Sapphira の特徴を、“Cather dramatizes in this woman [Sapphira] ... a remarkably complex human mixture. For Sapphira is capable of infamous villainy, but also of extraordinary generosity — an audacious mix.” (176) と述べ、その二面性を指摘している。
- 2 Sapphira が「許され」「理解される」女性として描かれる点については、

George Grimes も、“Sapphira we understand and sympathize with even as we may condemn her conduct toward the slave girl.” (512) と指摘する。

- 3 Skaggs もまたこの作品における Sapphira の悪や過ちの消化について、“We may have to classify the novel as a guilt-without-sin fiction, for the malevolence is real enough, but it achieves nothing.” (167) と指摘する。
- 4 この作品における社会問題の議論の欠如については、Tomas Pollard も、“One of the loudest political silences in the novel is the national debate over slavery during the 1850s.” (40) と指摘している。また、Mako Yoshikawa は、“Her [Cather’s] attitudes toward race ... are highly complex and ambiguous” (81) と指摘する。

参考文献

- Camacho, Roseanne V. “While Playing in the Dark: Southern Conversation in Willa Cather’s *Sapphira and the Slave Girl*.” *Willa Cather’s Southern Connections*. Ed. Ann Romines. Charlottesville and London: University Press of Virginia, 2000.
- Cather, Willa. *A Lost Lady*. London: Virago Press, 2006.
- . *My Mortal Enemy*. New York: Vintage Books, 1954.
- . *O Pioneers!*. New York: W. W. Norton & Company, 2008.
- . *Sapphira and the Slave Girl*. Lincoln: University of Nebraska Press, 2009.
- . *The Professor’s House*. New York: Vintage Books, 1973.
- . *The Selected Letters of Willa Cather*. Eds. Andrew Jewell and Janis Stout. New York: Vintage Books, 2014.
- . *The Song of the Lark*. New York: Signet Classics, 2007.
- Fetterley, Judith. “Willa Cather and the Question of Sympathy.” *Willa Cather’s Southern Connections*. Ed. Ann Romines. Charlottesville and London: University Press of Virginia, 2000.
- Grimes, George. “Willa Cather’s Scene Her Native Virginia.” *World-Herald* (Omaha) (8 December 1940): 4C.
- Lewis, Edith. *Willa Cather Living*. Athens: Ohio University Press, 1953.
- Pollard, Tomas. “Political Silence and Hist’ry in *Sapphira and the Slave Girl*.” *Willa Cather’s Southern Connections*. Ed. Ann Romines. Charlottesville and London: University Press of Virginia, 2000.

- Porter, David. *On the Divide*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 2008.
- Romines, Ann. "Introduction: Willa Cather's Southern Connections." *Willa Cather's Southern Connections*. Ed. Ann Romines. Charlottesville and London: University Press of Virginia, 2000.
- Russell, Danielle. *Between the Angle and the Curve: Mapping Gender, Race, Space, and Identity in Willa Cather and Toni Morrison*. Routledge: New York & London, 2006.
- Skaggs, Merrill Maguire. *After the World Broke in Two: The Later Novels of Willa Cather*. Charlottesville and London: University Press of Virginia, 1990.
- Urgo, Joseph R. "'Dock Burs in Yo' Pants': Reading Cather through *Sapphira and the Slave Girl*." *Willa Cather's Southern Connections*. Ed. Ann Romines. Charlottesville and London: University Press of Virginia, 2000.
- , *Willa Cather and the Myth of America Migration*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1995.
- Yoshikawa, Mako. "'A Kind of Family Feeling about Nancy': Race and the Hidden Threat of Incest in *Sapphira and the Slave Girl*." *Willa Cather's Southern Connections*. Ed. Ann Romines. Charlottesville and London: University Press of Virginia, 2000.
- Zabel, Morton Dauwen. "The Tone of Time." *Nation* 151 (7 December 1940): 574-6.
- 小鹿原昭夫『キャザーの小説の系譜：現実的な女と浮遊する男』東京：成美堂、1995.